



Title	テレビ特撮史における『ウルトラマン』シリーズの研究：文化的位相と表象性を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	神谷, 和宏
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15804号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92063">http://hdl.handle.net/2115/92063</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kamiya_Kazuhiro_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：神谷和宏

### 学位論文題名

テレビ特撮史における『ウルトラマン』シリーズの研究—文化的位相と表象性を中心に—

本研究は、日本の代表的な特撮である『ウルトラマン』シリーズについて、その文化的な位相や表象性について考究するものである。

第1章「本研究の目的と方法」では特撮研究をめぐる種々の問題を述べる。具体的には、ポップカルチャーの中でもアニメやゲームに比べて、特撮の研究は少なく、その研究においても、「ゴジラ」「円谷英二」を論じるものに偏りがちであること、多くの研究が表象分析に終始しているといったこと等である。既存の研究では、映像そのものを考察の対象としていないものが多いことにも触れる。これらを踏まえ、本研究は『ウルトラマン』シリーズを、①文化史として見たときの多面性とその変遷、②視覚文化としての表象性—『ウルトラマン』シリーズは何を、どのように描き出してきたのか—、という二点を映像分析を交えて明らかにするものであることが述べられる。

第2章「特撮、そして『ウルトラマン』シリーズに継承された文化」では、『ウルトラマン』シリーズ、あるいは特撮に接続されるに至った特撮以前の文化について考究する。2-1では特撮の主要なキャラクターである怪獣の起源としての異形の表象性について考究される。実社会の何らかの状況の暗喩として機能するほか、舞台劇、あるいは様々な消費コンテンツと化してきた点において、東西の古来の異形の系譜に怪獣はあるとあって良い。2-2では、草創期の特撮が共通して、アジアや中東、南洋といった異境を舞台化していることの起源として、それらの地域を外部の異境としてまなざす万国博覧会と同時代の視覚文化について触れられ、そこに由来する、特撮が持つ異境へのまなざしが「俯瞰的表象性」と名付けられ説明される。2-3では、『ウルトラマン』シリーズに、ドキュメンタリーと響き合うテーマが内在していることや、実験映像的な手法が用いられていることなどの起源として、戦後アヴァンギャルドについて考究される。既知のものとして認識されている事象の、より今日的な意味を問い直すという戦後アヴァンギャルドの思潮が、一つにはドキュメンタリー映像という方法によって具現化されたことや、そのような思潮や方法が『ウルトラマン』シリーズに接続された経緯とその状況が明らかにされ、そこでは俯瞰的表象性が、異境ではなく、むしろ日本に向いていることが論じられる。これらの議論に加え、2-4では、特撮など、現代ではポップカルチャーと称されるコンテンツが、便宜的にサブカルチャーと括られてきたことで、照射されることがあまりなかった本来の意味でのサブカルチャー性、例えばアンダーグラウンドな要素は特撮とどう関係しているのか、また『ウルトラマン』シリーズに、どう発現しているのか論じられる。

第3章『ウルトラマン』シリーズの文化史と表象論Ⅰ—特撮草創期から二度の怪獣ブームまで」と、第4章『ウルトラマン』シリーズの文化史と表象論Ⅱ—特撮の衰退／転回期からポップカルチャーとしての現代的展開まで』は本研究の核となる部分である。

第3章では、後に「第1次怪獣ブーム」「第2次怪獣ブーム」と呼ばれることになる、それぞれ1966年～1969

年、1971年～1970年代半ばの特撮の隆盛期、『ウルトラマン』シリーズはいかなるドラマツルギーをもち、ブームを牽引したのかを論じる。中でも1970年代の『ウルトラマン』シリーズにおいては、近未来が舞台であった過去の作品と異なり、同時代を舞台としていることでSF性が稀薄化する一方で、同時代の日本を俯瞰的に表象していたことが述べられる。具体的には、発展する都市を背景に、様々な問題を抱える青少年の実像が描かれる点などが着目され、同シリーズが青春群像、少年ドラマとして機能していた点を論じた。また毎回のように、ゲストキャラクターが描かれることで、結果として、個の集積としての大衆が描かれ、俯瞰的表象性が発揮されていたのがこの時期の特徴であることが述べられる。

第4章では、1980年代に特撮が衰退期を迎えた原因、また衰退の状況を考察する。一方で、この時期には特撮が徐々に大人の嗜好するカルチャーとして受容されるに至った。その状況について『ウルトラマン』シリーズをもとに明らかにするとともに、そのことが後に、特撮がポップカルチャーとして認識される前史として機能した点が述べられる。

1990年代は特撮再興の時期となり、『ウルトラマン』シリーズも再開されるが、ここでは、主要な登場人物のキャラクター設定に厚みが増したり、伏線回収の妙が加わったりし、ドラマの縦軸がより強く貫かれるようになった。アニメが男女の恋愛劇を扱うようになった時代を経て、『ウルトラマン』シリーズでも恋愛描写は濃厚になり、主人公と女性隊員の恋愛劇もまたドラマの縦軸を構成する重要な要素の一つとなった。その反面、市井の人々の描出は減り、第2期シリーズのような個の集積としての大衆の描出は後景化した点が述べられる。社会の状況よりも、レギュラーキャラクター個々の人生ドラマを描くというドラマツルギーは、異境をまなざしたり、東京を中心に同時代を生きる大衆を描いたりする、俯瞰的表象性を稀薄化させるものであった。

このような特撮そのものの変遷に加え、メディアミックスの状況、あるいはファン文化との関連という視座も無視できない。4-3「特撮と雑誌—メディアミックスの特徴と越境するファン」では、『ウルトラマン』シリーズをめぐるメディアミックスの状況についてファン文化と絡めて述べられる。

第5章は、『ウルトラマン』シリーズが現代社会における文化資源としてどう活用されているか、つまり、「テレビ」の「特撮」番組という枠を超え、現代の諸文化とどう接続され、その価値を発揮しているのかという点をいくつかの事象をもとに明らかにする。文化資源の定義を確認し、文化資源としての『ウルトラマン』シリーズの特徴を芸術、教育、広告、地域振興等の諸側面から考究する。

第6章では、『ウルトラマン』シリーズは文化史的にどのような変遷を辿ってきたのか、延いては特撮は文化史的にどのような変遷を辿ってきたのか、また『ウルトラマン』シリーズは何をどのように表象してきたのかというリサーチクエスチョンについての答えが提示される。